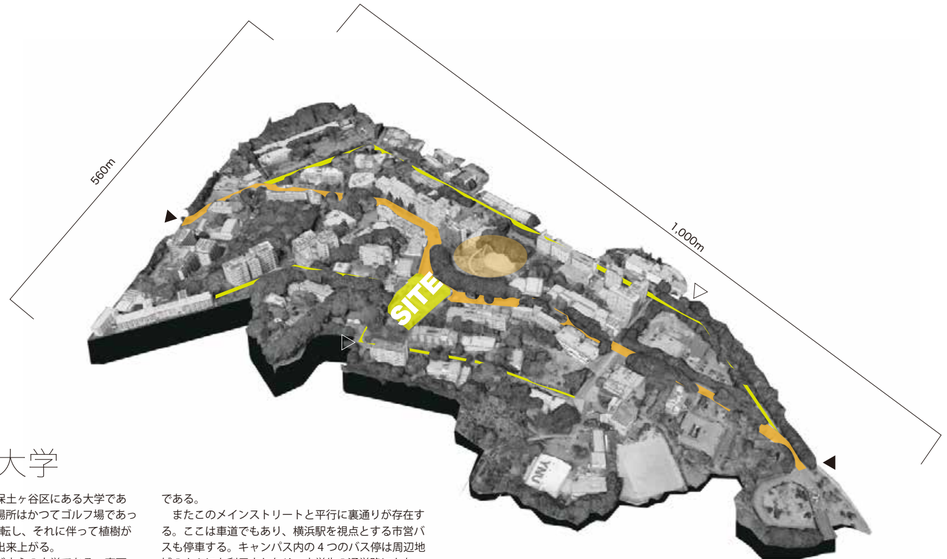
内臓的図書館



メインストリート
裏通り

横浜国立大学

横浜国立大学は、横浜市保土ヶ谷区にある大学である。武蔵野丘陵にあるこの場所はかつてゴルフ場であったが、1940 年代に大学が移転し、それに伴って植樹が行われ今の「森の大学」が出来上がる。

このキャンパスは「道」が中心の大学である。東西に伸びたキャンパスをメインストリートが貫通し、この空間に沿って広場が配置されている。最大の広場である野外音楽堂は、キャンパスのちょうど中央に存在し、幅 6 m ほど植樹帯でメインストリートとゆるく分節されている。昼食になるとこのヤオンで食事する学生やコーラスサークル、ジャズ研、ラクロス部などさまざまなアクティビティが同時に抱える。休日や授業中には、キャンパス内にある保育園の子供たちが先生に連れられ遊んでいる。このような広さのあるボイドがメインストリートのアルコーブ的に複数存在し、それらをつなぐのがメインストリート、通称『メンスト』である。

またこのメインストリートと平行に裏通りが存在する。ここは車道でもあり、横浜駅を視点とする市営バスも停車する。キャンパス内の 4 つのバス停は周辺地域の人々にも利用されたり、小学生の通学路にもなっていたりと日常的に非学生が通行する道である。「メンスト」には講義棟が、「裏通り」には研究棟が配置され、このふたつの道の間をつなぐ複数の細道が、キャンパスの静かな空間になっている。

大学の図書館

大学の図書館は、その収蔵する機能を超えて、その場所が非常に重要な場所である。この大学において図書館はとても重要な位置にあり、ここでの活動はキャンパス全体と繋がっていける。

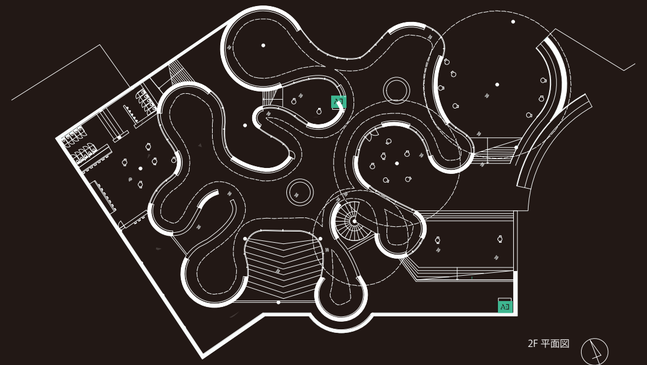
『メンスト』と「ヤオン』

キャンパスは、屋外空間こそ面白い場所である。
この学校にとって、メインストリート 通称『メンスト』は、学校の中心であり、活動の中心である。
それは単なる移動路を超えて、付随する小さな広場そして野外音楽堂 通称「ヤオン」とともに、学生の居場所を散りばめている。

『内臓的空間』

内部について

人体において、内部とは何処に当たるのだろうか。例えば**胃の中は体内ではなく体外であると言える。**食物は、胃にきただけでは内部ではなく、吸収されてはじめて体内に入るのである。さらに内外を隔てる境界をその目の細かさで捉えるなら、分解しても透過する胃の壁も境界は持っていないのかもしれない。しかし、もしあなたが胃の中に入ったなら、「私は内部にいる」と感じるのではないだろうか。



2F 平面図

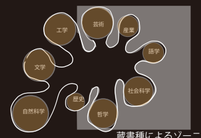
『内臓的空間』の 肉＝本

大学の図書館に求められるのは、静かな閲覧・自習空間だけでなく、大学の中心として他学部が一堂に会す議論・活動空間として存在である。このふたつの相反する要求を受け止める存在として、内蔵的空間を利用する。「内部空間」静かな閲覧空間として、そして内部空間が生み出す「内蔵的空間」を学生の活動空間として位置付け境界を持ちながらも相互の設置面積がおおきい建築計画とした。「内蔵的空間」の一部分は箱で覆うことで屋内の内蔵的空間を自習空間としている。

図書館の肉は「本」　この図書館が『内臓的空間』を持つ　衣を纏い２種類の外部を作る

房

現在の蔵書は９のカテゴリーに分類される。新しい図書館では、それらの場所をそれぞれの「ふさ」にわけ、本の場所を空間的に与える。



蔵書種によるゾーニング

２つのラウンジ

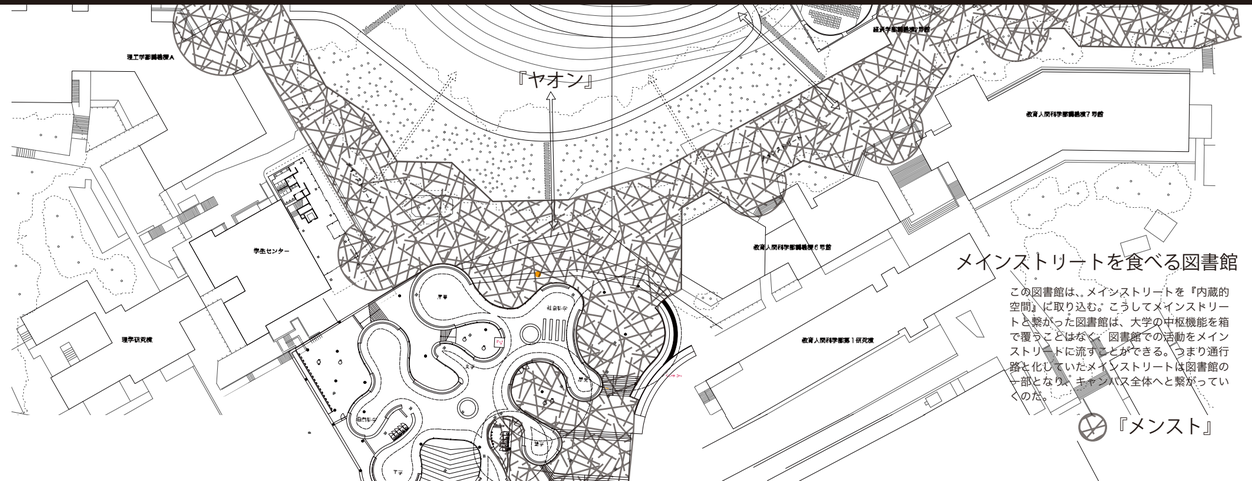
中央のアメーバが「屋内の LOUGE」、「屋外の LOUNGE」をつなぐ。また同時に２つの LOUNGE は、CAFE・RESTAURANT からもアクセスでき、様々な人が様々なアクティビティを連続させる。

断面ダイアグラム

建築における『内臓的空間』

「内部に囲まれることによって定義される内部的外部」＝『内臓的空間』は建築にも存在することができる。この**無境界の内部空間は、内外によって途切れることない活動を育むことが可能であり、グラーデーショナルな中間領域**として成立する。

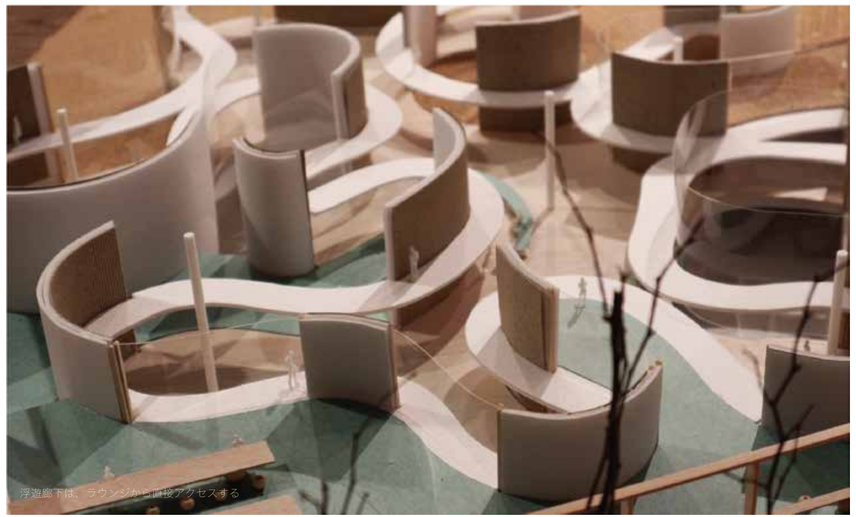
3F 平面図



メインストリートを食べる図書館

この図書館は、メインストリートを『内蔵的空間』に取り込む。こうしてメインストリートと繋がった図書館は、大学の中枢機能を箱で覆うことはなく、図書館での活動をメインストリートに流すことができる。つまり通行路と化していたメインストリートは図書館の一部となり、キャンパス全体へと繋がっていくのだ。

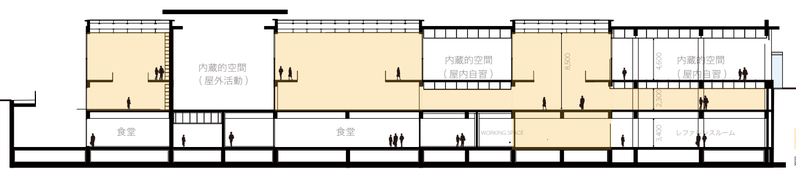
『メンスト』



浮遊廊下は、ラウンジから直接アクセスする

本のかべは、林の中のような見え隠れする空間となり、
唐突にひらけた視界を作り出す。

浮遊廊下から見下ろす。アメーバ内部は、ブラウンジングを中心として、「本を読む」ことを重要視する場所


内蔵的空間
（屋外活動）
内蔵的空間
（屋内自習）
8,500
4,000
内蔵的空間
（屋内自習）
1,000
食堂
食堂
WORKING SPACE
1,400
レクチャールーム

BOOKS

断面図 B-B'

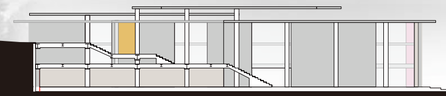
大学の図書館は、本を読むことを超えてさまざま人が一堂に会す、広場のような居場所になりうる。特に、この大学図書館の位置は、学校の中央かつ、野外音楽堂の正面という特異な場所である。既存の図書館はキャンパスに対して閉鎖的に立っているが、よりメインストリートを取り込むように立つならば、この場所は野外音楽堂と呼応し大きな活動空間になるだろう。

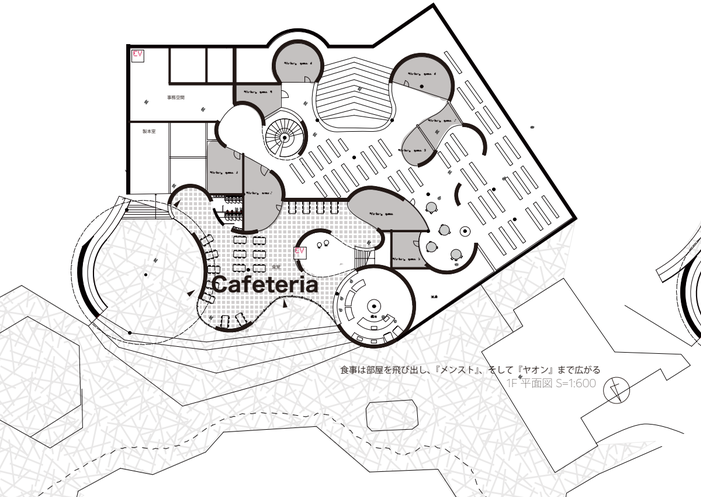
しかし、時には一人で自分の専門に対して向きうことも大学生には大切で、読書に限らず、研究や創造には孤独も重要な要素である。専門分野への熱量が激しく現れるような食堂のような場所は確かに存在していないが、一人の孤独空間も図書館は担わなくてはならない。

この提案は、一つの空間に両立しえない、この２つテーマに対して、『内蔵的空間』という中間領域を持ち込むことによって、「極限まで内部的な外部」と「密接に分断される２空間」を取り入れ、両立を試みた。その根幹にあるのはキャンパスの屋外空間への期待である。

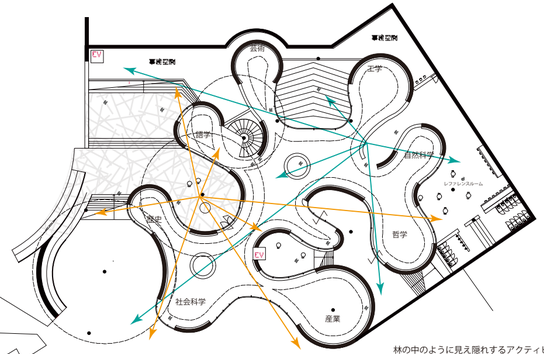
ある日、野外音楽堂の野原に、ベンチが設置されているのを発見した。大学が設置したものだが、そこで起きたのは、定員いっぱいの新設ベンチとほとんど腰を下ろされない芝であった。今まで、野外音楽堂でご飯を食べるのなら、芝は腰をおろすのが当たり前で、そのことに抵抗感のある人などほとんどいなかったのである。新設ベンチが作り出したのは「綺麗な座る場所」、だけでなく、「座る場所でない芝」であったのだ。

この光景を目の当たりにしたとき、その現実への悲しみと、しかし、たったいくつかのベンチ与えた空間変化の大きさへの感動があった。道のキャンパスである横浜国大のメインストリートは、ダイアグラムとしてはさまざまなアルコーブをもち、階段も含めベンチなどのさまざまな座る場所も用意されている。しかし現実はそこまでの利用はない。メインストリートはただの通行路になっているのだ。だが、野外音楽堂の新設ベンチのように、メインストリートの位置付けを変えるような建築を与えたならこの関散とし通路が過ごす場所へと変わる、そのような可能性を感じた。メインストリートを図書館に近接させ、図書館をメインストリートに流し込むような建築を目指している。

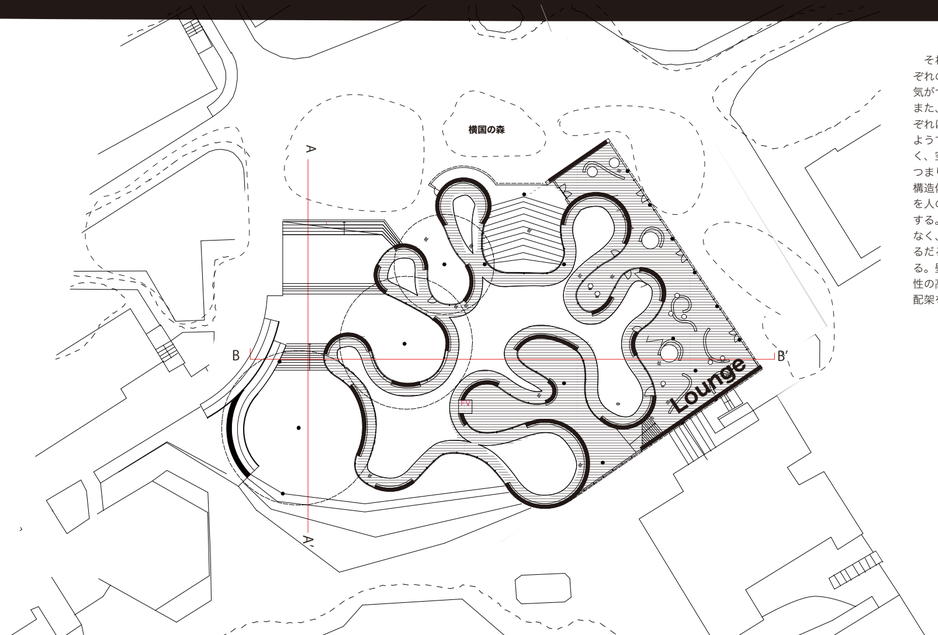




食事は部屋を飛び出し、『メンスト』、そして『ヤオン』まで広がる
1F 平面図 S=1:600



林の中のように見え隠れするアクティビティ
2F 平面図 S=1:600



それぞれの曲面壁は本棚でもある。それぞれの壁面をなぞるように歩いていると、気がつけば異なる分野の棚にたどり着く。また、各分野が房ごとになることで、それぞれは専門性に満ちた小さな専門図書館のようであり、配列によるゾーニングではなく、空間としてのゾーニングが行われる。つまり本は自立した棚に収めるのではなく構造体の曲面の壁と共に収めることで、床を人の過ごす場所として開放し閲覧空間とする。ススキ野原に潜るような図書館ではなく、大きな谷地に籠るような図書館となるだろう蔵書は２階部分の壁面にも設置する。壁の上方にはデッキが回り、より専門性の高い書物などをおくことで、立体的な配架を行う。

3F 平面図 S=1:600